（d）全般的な遂行状況

・前期の遂行状況を自己分析シートにより確認し、後期の自己目標を設定した。ほぼ妥当な目標設定を行っていた。　【数値入力 L6 ／文書入力 L4 ／コピー＆ペースト L4 ／検索修正 L5】

・毎回取り組む課題を自分で選択し、自己目標を意識し課題に取り組むことができた。早く次の課題に取り組みたくて焦っていた場面もあるが、作業遂行は正確であった。

・すでに経験したことのある課題は、スムーズに遂行していた。新しく取り組む課題は、マニュアルを自分で確認しながら遂行していた。

・困難場面では支援を適切に求めることができていた。

（e）各課題の遂行状況

〇数値入力課題：練習モード・試行数 10・ブロック数 5。どのレベルもブロック数の増加と共にスピードがアップ、自己評価でも「目標時間内に出来たので良かった」と記している。

〇文書入力課題：練習モード。「試行数 3・ブロック数 3」は自己分析による設定である。最終的にはレベル 5 まで挑戦し、安定した作業遂行が見られている。自己評価では「漢字の読みが苦手なので、読めるようになってスピードアップを図りたい」と述べている。補完手段として、各レベルに出てくる『漢字の読み仮名シート』を活用した。

〇コピー＆ペースト課題：練習モード・試行数 5・ブロック数 2。試行を重ねる毎に課題遂行時間が短縮される傾向が見られる。自己目標よりも毎回短縮されていた。レベル 4 まで安定した作業遂行であった。

〇検索修正課題：練習モード・試行数 5・ブロック数 1。レベル 1 ～ 2 では完答であるが、さらにレベルが上がるとミスが目立つようになる。レベル 5 では、半角スペースやメールアドレス等にミスが生じるようになった。自己評価では「とても難しく、やりにくかった」と述べている。

〇ファイル整理課題：セルフチェックモード・試行数 6・ブロック数 3。『ファイル整理ヒントシート』、及びセルフチェック時に表示されるヒントをもとに、各部署で発生する業務内容を確認しながら実施した。時間の関係でレベル 1 のみを 3 ブロックで終了せざるを得なかった。馴染みのあるファイル名やフォルダに置き換えることが出来れば、ファイル整理課題は、幅広い生徒に対して実施可能になると思われる。

④校内実習における事務課題【数値チェック課題・宛名書き課題】の取り組み

事務課題では、基本 13 課題の数値チェック課題と、ホームワーク版の宛名書き課題を組み合わせて実施した。この組み合わせは第 3 期目からで、それ以前は宛名書き課題のみで実施していた。

宛名書き課題は、提供されたリストに従ってはがきの表書きをする課題である。レベルが上がるにつれ、記入すべき情報量が増加する。生徒の中には住所や氏名に登場してくる、今まで書いたことのない「漢字」に戸惑う者が多く見られた。したがって、漢字力の差がそのまま作業結果に表れる傾向がある。

この課題を「国語」として捉えれば、漢字の学習を施してからの実施ということになろうが、「仕

事」として捉えるならば、作業指示に従って着実に遂行する姿勢が求められるであろう。その環境設定の元で実施すれば、知識外文字は模写し、困難文字は職務上の質問をするというルールを設けることで仕事を意識した実習になると考えている。支援者側の対応する姿勢により、この課題は目的を異にする可能性があるので、導入にあたって担当者間で意志の疎通を図っておく必要がある。

第 1 期では、上記のような環境設定を行っても対応が困難なケースが見られたことから、ルールさえ理解できれば対応が可能と思われた「数値チェック課題」を組み合わせることにした。　第 2 期で OA 課題対象生徒に試行的に導入してみたところ、生徒の取り組みは予想以上に良好で、支援方法さえ検討すれば十分課題として導入できるとの感触を得た。

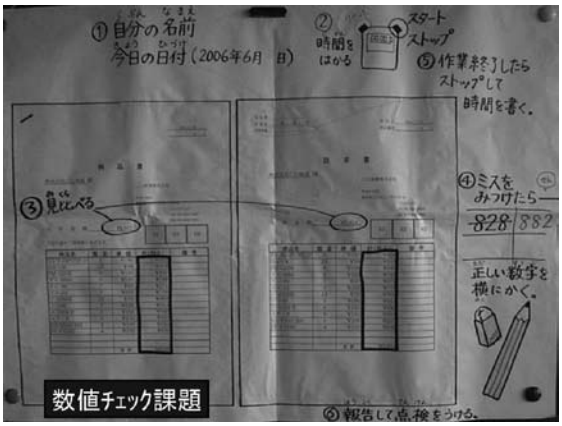

図２－１９　数値チェック課題説明シート

以上のような経過を経て、第 3 期から本格導入に踏み切った。その際作成した説明用シートを図２－１９に示す。各自で点検ができる者は、『1 試行終了後に次の課題を自分で取りに行き、1 ブロック終了後セルフチェックをして、支援者に報告』という流れをとった。

なお、数値チェック課題には全員が参加し、その作業遂行力等により「宛名書き課題」に移行させるようにした。数値チェック課題では、参加生徒全員が対応でき、宛名書き課題が困難な生徒でも、比較的良好な作業遂行が可能であった。

【課題の準備方法】

数値チェック課題については、納品書は各レベル毎に 1 冊の冊子として作成し、請求書のみ上述のように単票で準備した。宛名書き課題については、1 試行分の 6 枚のはがきと自己評価をＡ 3 用紙 1 枚に印刷し、対応する住所録は各レベル毎に冊子として準備した。

第 1 期に担当した教員からは、次のような意見が寄せられている。

① データの漢字が難しかったが、毎回の自己評価や振り返りは、とても有効である。
② 各自の作業量によりレベルを設定できる点が良い。4 まで到達した者がいた。

⑤校内実習における実務課題の取り組み

実務課題では、基本 13 課題のナプキン折り課題と、ホームワーク版の洗濯物たたみ課題を組み合わせて実施した。それ以前はナプキン折り単独で実施していた。

ナプキン折り課題は、動画マニュアルと静止画マニュアルの 2 点が提供されており、それに従って、テーブルナプキンを折る課題である。プロジェクタを利用し大きな画面で、複数の生徒が作業手順が確認できるようにした。また、全体の流れについてこれなかったり、静止画の方が理解しやすい生徒の対応のため、予備のパソコンを用意した。

実際にやってみるとテーブルナプキンの性質上、その扱いが難しい生徒がいることがわかった。そこで、事前に同じ大きさの広告紙等で対応するようにした。この工程を取り入れたところ、1 時間半の作業時間中、集中することが難しい生徒も、広告紙で折った「作品」を見本にすることでやる気が起こり、集中することができるようになった。作業の成果が形として残ることが効果的だったようである。これは補完手段のひとつと考えられる。

洗濯物たたみ課題を取り入れたのは、紙類ではなく「布を折る」という共通の工程から、よりスムーズにナプキン折り課題への導入を図るために検討された。同様に動画マニュアルを用いた。ハンカチ、ハンドタオル、タオルの 3 種類と収納かごを人数分用意し、実施した。日頃から家庭等で手伝いをしている生徒でも、ロゴの位置の指定に戸惑う生徒もいたが、比較的スムーズに作業の遂行が図られた。また、手に障害がある生徒からは、下から上方向に折った方が布の端が合わせやすいと意見があった。物品準備の都合もあり、レベル 2 までの実施に留まった。図２－２０に実習の様子を示す。

図２－２０　ナプキン折り課題・洗濯物たたみ課題の実施状況

担当した教員からは、次のような意見が寄せられている。

① ハンドタオルは、どの障害の生徒も比較的スムーズにたたむことができた。工程も 2 段階と少ないので、取りかかりには良いのではないか。
② 3 分の 1 や 6 分の 1 に苦労する生徒が多かった。画像から大凡の見当で折ることができても、次の工程で端と端が合わず、その調整ができる生徒は少なかった。
③ 「3×4 折り」などのように、布の背面に折る工程では、背面での調整が直接目での確認が難しいため苦心していた。
④ 静止画での文章理解が難しいため、動画を一時停止しながらの対応が殆どだった。
⑤ 知的に高い生徒になると、回数を重ねる毎に、ナプキンの扱いに慣れて上達する者と、工程が増えるに従って集中力を欠く者に分かれた。
⑥ 自閉症の生徒の中には、「映像を見る→その手順に沿って折る」という段階が踏めず、映像と共にすぐ折り始めたり、先の工程に進んでしまい映像の指示がわからなくなる者が多かった。

（エ）進路指導・移行支援・卒業後支援における活用【発達障害者への活用事例】

最後に、在学中からトータルパッケージを活用しながら、卒業後も引き続き、支援の中で MWS ホームワーク版を活用した事例について紹介する。

「発達障害」と呼ばれるケースで、トータルパッケージが目指している「認知の障害」を有する方へ

の適応可能性の拡大を意識しつつ、高等部 3 年生 4 月より活用を開始した。

在学中の活用では、本人が今まで否定してきた職域への志向を見いだした。卒業後の生活では、在宅生活における生活リズムを維持するための活用を行った。その他、様々な場面での活用を試みた。また、卒業後の支援という視点で、家族が支援者として機能するための課題について見えてきたことについても触れることにする。

①対象者

・1－I　男性　19 歳（支援当時）

・高機能広汎性発達障害（手帳取得なし）

②本人の状況

・ADL は自立している。日常生活面で常識的なことは苦手である。

・漢字の知識はかなりあるが、文書の読み取りは難しい。中学 3 年程度の計算は確実に出来る。知的な障害はみられない。

・興味のある事は良く話されるが、コミュニケーションには課題がある。

・OA 機器類の扱いに長けており、一度の学習で身につけ応用できる。

③支援目標

・対応可能な職域の範囲の拡大

・職務に係るルールの理解と遂行

・職務の上で必要なコミニュケーションスキルの改善

・セルフマネージメントスキルの向上

・ストレスや疲労のマネジメントを図る

・作業遂行力の向上と対処行動の獲得（補完行動、補完手段の開発）

・卒業後の在宅での規則正しい生活リズムの維持（在学中は寄宿舎生活であった）

④支援経過

《在学中の活用状況》

・「自立活動」授業場面で週 2 回（月曜日 1 時間、水曜日 2 時間）一年間実施。

OA 課題 … 数値入力、文書入力、コピー＆ペースト、ファイル整理

実務課題 … ピッキング、重さ計測、プラグタップ組立

《卒業後の活用状況》

・自宅にて、在学中に引き続き OA 課題に取り組む。

作業結果をエクスポート、メールに添付し学校に送付。

その作業結果に対するフィードバックをメールにて実施。

・M-メモリーノートの代用として、ビジネスダイアリーで一週間のスケジュール管理を家族の支援のもとで実践。

⑤支援の結果

【在学中の状況】

ⅰ）OA 課題

数値入力課題、文書入力課題、コピー＆ペースト課題、ファイル整理課題、いずれの課題についても、レベル、試行数、ブロック数を最高に設定しても安定した作業量を確保できた。テストモードで実施したが、課題終了後、記録された課題遂行状況を自ら確認することが習慣になっており、作業効率の向上や誤りに対する対処行動の獲得に役立てている様子が見られた。

ⅱ）実務課題

もともと OA 機器の扱いに長けていたこともあり、将来の職場での業務として検討されていたが、対応可能な職域の幅を広げることを目標に、OA 以外の作業体験を計画した。そのことについて、事前に本人から了解を得たうえで実務課題を実施した。

（ピッキング課題）

本人への事前説明で、ピッキング等の作業には、得意としている「計算力・暗記力」が生かせるかも知れないというコメントを与えた。OA 作業に固執するかと思われたが、スムーズに実務作業に取り組むことができた。

並行して実施してきた職場実習では、特例子会社における「OA 作業」から、官庁における「事務体験」に拡大したことも、抵抗感を軽減した要因であると思われる。

ピッキング課題における具体物（文房具）での作業遂行は、規格等にも注意を払い、正確な対応が見られた。また、抽象物（薬品びん）での作業遂行では、必要量を組み合わせる工程に長所が生かされたこともあり、自信を持って作業遂行を行うことができた。ピッキング後の自己確認、支援者に対する報告等も定着した。

さらに、Level5 において、分類 ID を間違え、指示と異なる薬品びんを選択するというミスが生じたが、自分自身でそのミスを発見し、適切に自己修正することができた。

これらの体験は、「OA 作業」以外の職域への適応可能性を、本人自らが発見することにつながった。「就労できない」と自己否定していたことが、これらの経験を通じて「就労できるかもしれない」という、新たな将来の展望を切り開くことになったといえよう。

（プラグタップ組立課題）

初めて電動ドライバーの利用に挑戦した。初期段階では、要領を得ず恐る恐るの作業遂行であった。手でしっかり押さえ、電動ドライバーで振り回されない方法を例示すると、比較的スムーズに受け入れ、それ以降、安定した作業遂行になった。この作業体験も、新たな自己の発見につながったといえよう。

その他、ナプキン折り（校内実習で体験）、重さ計測課題についても同様に実施した。

【在学中から卒業に至るまでの就労支援の状況】

上記《在学中の状況》で述べたように、OA 作業以外での就労可能性を認識してきたことを踏まえ、

本人の生活圏域内での幅広い職種での就労可能性について検討を行った。

本人自身も就労可能性を意識し、この提案に対し前向きな態度を表明した。

徒歩で通勤可能な範囲で事業所の協力を得ることができたため、本人の意向を踏まえ職場実習を実施した。本人のストレス等も考慮し、比較的短時間（午前中 2 時間程度）からのスタートとした。「OA 作業」等も用意できる環境であったが、当該事業所の本来業務である、製造加工ラインにおける作業から従事することになった。卒業時までに 3 回実施した。

1 回目は、午前中の一種類の作業が終了するまで（約 2 時間程度）の設定とした。最初は不安もあったが、実際にやってみると意外とうまく出来たことで、自信を得たようであった。

2 回目は、午前中一杯まで作業時間を延ばし、他の従業員と同様に 3 時間以上の作業を続けることができるようになった。作業内容の理解については、口頭指示と併せて手本を提示することで、すぐに修正でき、間違えることなく作業を継続できた。

3 回目も同様に対応する。卒業後も同様の実習を長期的に繰り返し、スキルアップを図りつつ、就労を目指すこととした。

【卒業後の状況】

前述の通り卒業後も同様の実習を実施したが、1 回目に不適応を起こし、支援の再構築を迫られた。

保護者の協力が得られたため、ホームワーク版を活用しながら、他の社会資源を投入して規則正しくリズムのある生活を維持していくことを提案した。家庭の方では、ビジネスダイアリーを活用し、毎週土曜日に次週の計画を本人と共に計画された。それに従って規則正しい生活を送りながら在学中から慣れ親しんだ OA 課題を自宅で取り組んだ。

セルフチェックモードにて、「数値入力課題」・「文書入力課題」に取り組んだが、単調になりがちであるので、次に示す方法で支援者と結果のやりとりを行うことにした。

OAWork には作業結果を外部に出力する機能が備わっているので、毎日の作業終了後エクスポートし、そのファイルをメールに添付する形で、学校に送付させていた。

このことで、互いに遠隔地に居りながらも、本人の作業状況を詳細に確認することができ、さらに本人に対するフィードバックも可能となった。

卒業後、2 ヶ月近くやり取りを続けたが、「速く、正確に入力しなければいけないというプレッシャーがかかり、想像のつかないほどイライラした。挑戦しようと思ってはいるが、成功した場合は良いが失敗が怖いので、やめたい」、「失敗しないように慎重にやっていたら、時間がかかり、とてもイライラした。改善のしようがない」と中止の連絡があった。直接的な対応がリアルタイムに困難であり、支援の限界を感じることとなった。

しかし、この方法は中長期的な就労支援において、本人の就労に向けたモチベーションを維持できる可能性があり、特に対面の直接的な支援を要しない方法として、大変有意義であったと感じている。ただ、この方法を継続させる方法として、身近な家族の協力を得ることが必要であったと反省している。このことについて位上（2005）は、MWS ホームワーク版事務課題及び実務課題を実施した結果から、

「保護者から本人へのねぎらいやフィードバックは大きな強化要因になると思われる」と述べている。

この事例では在学中の早い段階から、具体的な家庭の中での支援の在り方について啓発を行う必要性があったと反省している。その中では、OA 課題以外のホームワーク版・実務課題または事務課題等、家族にとっても容易に支援しやすい課題の提案が適切ではなかったかと考えている。

その後、他のホームワーク版の活用について提案を行い、別の視点からの支援体制の構築を検討している。

図２－２１　重さ計測課題・検索修正課題・ピッキング課題・数値チェック課題　（左より）

（6）まとめ

以上、2 年間に渡る教育機関における試行事例を紹介してきた。ここで見えてきたトータルパッケージの教育現場での活用可能性等についてまとめておきたい。

（ア）幅広い児童・生徒への活用

就労を目指す者にとっては、入学時等の早期から段階的・継続的に取り組むことによって、職業準備性を高めるとともに、そのモチベーションを維持させ、円滑に次の職業リハビリテーションサービスへ移行できる可能性があると思われる。前述の事例（イ）③の事例 1 － C、1 － D、1 － E に示した、生活場面でのホームワーク版の導入は、これに該当するであろう。

トータルパッケージによる標準化されたワークサンプルの活用は、教育機関における職業リハビリテーションを活性化させ、既存の学習内容の改善に向け、大きなヒントを与えるのではないかと思われる。

また、就労のみを対象とするのではなく、生活面に課題を有する者への改善の提案や、比較的障害の重い生徒に対する学習にも有効であると思われる。前述の（イ）①の事例 1 － A や、（イ）②の事例 1 － B、（イ）④(b)の事例 1 － F 等が、それらに該当するであろう。

これらの知見を該当児童・生徒の卒業後の生活に生かし、より豊かな生活を目指せるように支援を試みてみたいと考えている。

このように考えてくると、教育現場での活用は、一人ひとりの児童・生徒にとって充分有益なものと成りうるのではないだろうか。

冒頭に述べた『特別支援教育』の動向に対しても、トータルパッケージの活用は大きな指針を与えるものとなるであろう。

（イ）職業リハビリテーションに対する教職員の意識を高める

副産物のようなものであるが、トータルパッケージの試行を通して、教職員の職業リハビリテーションに対する意識が変化してきたことが挙げられる。

従来から、教職員は障害のある児童・生徒の自立や社会参加に向け、授業等を通じて努力をしてきている。ただ、最近の産業構造の変化や、職場で求められるスキル等については、相手を直接知る機会がなかなかないため、対応しきれているとは言い難かった。

トータルパッケージが導入されたことで、職業自立等への具体的なイメージの提供がなされたと言って良いだろう。トータルパッケージが目指している「セルフマネージメントスキルの構築」、それに伴う認知面へのアプローチとして提唱されている「補完手段」や「補完行動」の捉え方は、従来、漠然としていた障害児教育における職業教育にも指針を与えていくと思われる。

《引用・参考文献》

位上典子（2005）．地域障害者職業センターでの家族支援技法におけるトータルパッケージホームワーク版の活用について　第 13 回職業リハビリテーション研究発表会論文集，pp.112-115

木村彰孝・大石文男（2005）．　養護学校におけるトータルパッケージの活用と展望　第 13 回職業リハビリテーション研究発表会論文集，pp.208-211

木村彰孝（2006）．　養護学校におけるトータルパッケージの活用と展望(2)　日本職業リハビリテーション学会第３４回大会講演予稿集，pp.102-103

木村彰孝・菅宣義（2006）．養護学校におけるトータルパッケージの活用と展望(3)　第 14 回職業リハビリテーション研究発表会論文集，pp.112-115

山口県立山口養護学校職業科就労実務（仮称）担当グループ（2006）．知的障害養護学校におけるトータルパッケージの活用 ～ 2006 年度中間報告～　山口県立山口養護学校